

WebOTX アプリケーション開発ガイド

WebOTX アプリケーション開発ガイド

バージョン: 7.1

版数: 第 2 版

リリース: 2008 年 11 月

Copyright (C) 1998 – 2008 NEC Corporation. All rights reserved.

目次

1. 初期設定	3
1.1. Developer's Studio	3
1.1.1. Developer's Studioの起動	3
1.1.2. 環境設定	4
1.2. テスト用サーバ	6
1.2.1. デバッグ用ポートの設定	6
1.3. WTP	7
1.3.1. XDocletの設定	7
1.3.2. WebOTX ランタイムの設定	8
1.4. TPTP	11
1.4.1. Agent Controllerの設定	11

1. 初期設定

本章では、WebOTX Developer に含まれる Developer's Studio およびテスト用サーバ初期設定について説明します。

1.1. Developer's Studio

Developer's Studio は、初回起動時にインストールされた環境をチェックし、初期設定を自動的に行います。そのため、手動で行わなければならない初期設定はありませんが、インストールしたマシンの環境によっては、初期設定を見直す必要がある場合があります。そこで、ここでは Developer's Studio の初回起動時に行っている設定について紹介します。初回起動直後に初期設定が正常に行われているか確認するためにお役立てください。

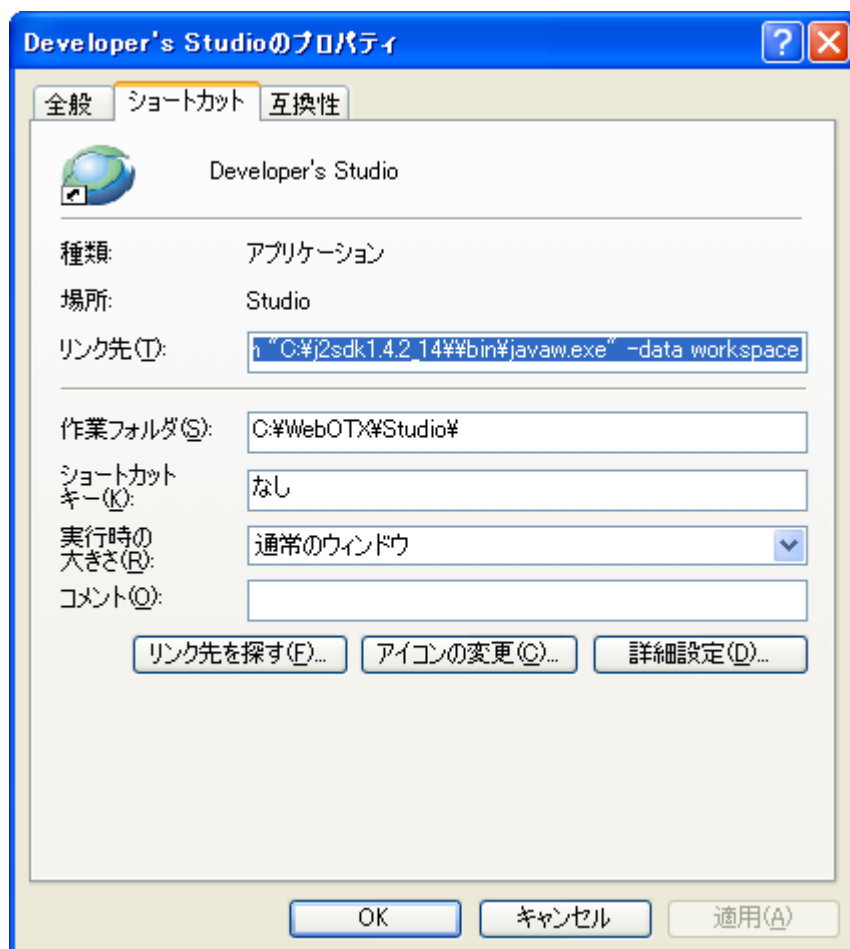
1.1.1. Developer's Studio の起動

Developer's Studio の起動方法と起動時のオプションについて記述します。

「スタート」メニューからの起動

Developer's Studio の起動は、「スタート」→「すべてのプログラム」→「WebOTX」→「Developer's Studio」メニューを選択します。

起動時のオプションを指定する場合には、上記メニューを右クリックして「プロパティ」を選択します。



上図の「リンク先」の値を変更します。

例:

```
"C:\WebOTX\Studio\Eclipse.exe" -vm "C:\j2sdk1.4.2_14\bin\javaw.exe" -data workspace  
-vmargs -mx768m
```

workspace の切り替え

プロジェクトを保存している場所を workspace と呼び、workspace を切り替えることで別のハードディスクの記憶領域で作業を行います。

起動時の“-data”オプションを変更することで、workspace を切り替えることができます。

例:

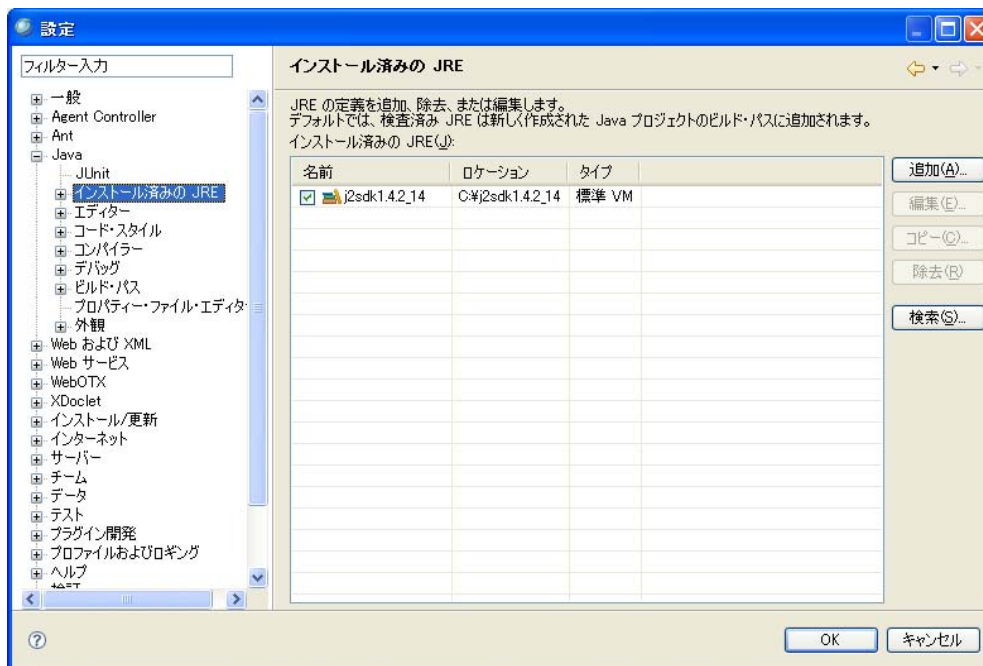
```
"C:\WebOTX\Studio\Eclipse.exe" -vm "C:\j2sdk1.4.2_14\bin\javaw.exe" -data  
"C:\TMP\workspace"
```

1.1.2.環境設定

メニューの **ウィンドウ | 設定** で表示されるダイアログで次の設定を確認してください。

Java - インストール済み JRE

J2SE 1.4.2 または 5.0 SDK がリストに表示されているとともに、チェックが入っていることを確認してください。それ以外のバージョン、あるいは Runtime のみでの動作はサポートしていません。



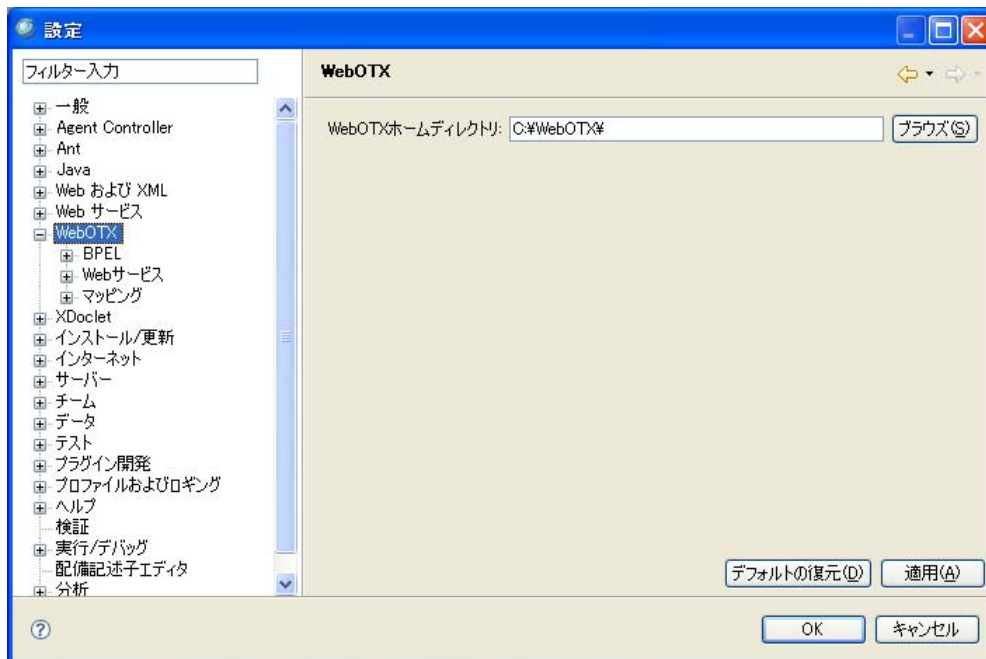
複数の J2SE が混在する場合、有効にしたいものにチェックします。また、意図した J2SE がリストに表示されていない場合、**[追加]** ボタンを押し、J2SE のインストールフォルダを指定してください。



Developer's Studio は J2SE SDK の Java ソースコンパイル機能を利用しているため、ここで Runtime を指定しても動作しません。

WebOTX

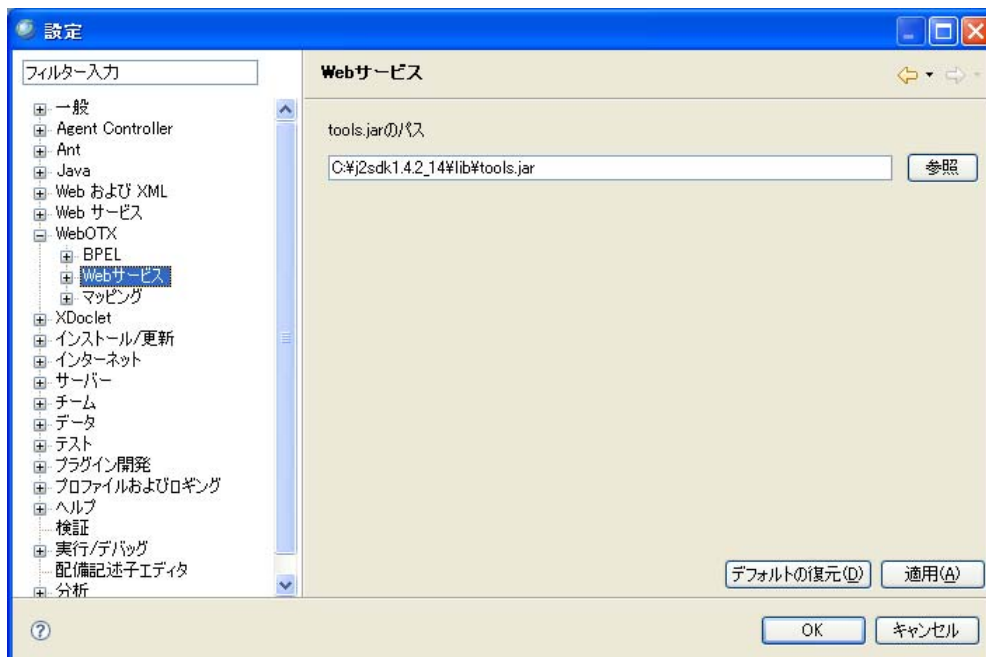
WebOTX ホームディレクトリがインストールされている WebOTX のルートフォルダになっていることを確認してください。WebOTX のルートフォルダがきちんと設定されていない場合は、絶対パスで指定しなおしてください。



Developer's Studio のルートフォルダではありません。

WebOTX - Web サービス

J2SE 1.4.2 または 5.0 SDK の lib フォルダにある **tools.jar** が設定されていることを確認してください。tools.jar のパスがきちんと設定されていない場合は、絶対パスで指定しなおしてください。



1.2.テスト用サーバ

テスト用サーバの初期設定はインストール時に自動的に行われます。そのため、手動で行わなければならない初期設定はありませんが、インストールしたマシンの環境によっては、初期設定を見直す必要がある場合があります。そこで、ここではテスト用サーバのインストール時に行っている設定について紹介します。初期設定が正常に行われているか確認するためにお役立てください。

1.2.1.デバッグ用ポートの設定

テスト用サーバには、あらかじめデバッグ用のポート「4004」が設定されており、いつでもデバッグを開始できるようになっています。もし、このポートを閉じる必要がある場合は、運用管理コマンドを使って設定を変更します。

順序	手順
1	Windows のスタートボタンから、 プログラム WebOTX 運用管理コマンド を実行し、運用管理コマンドを起動します。「otxadmin> 」というプロンプトが表示されることを確認してください。
2	次のコマンドを実行してテスト用のドメインにログインします。 <code>otxadmin> login --port 6212 --user admin --password adminadmin</code>
3	次のコマンドを実行してデバッグ設定を解除します。 <code>otxadmin> set server.java-config.debug-enabled="false"</code>

MEMO

デバッグ用ポートのポート番号のみを変更することはできません。

MEMO

このユーザ、パスワードは初期値です。変更した場合には、その値を使用してください。

1.3.WTP

Web Tools Platform (WTP と呼びます)を利用する場合は、以下に示す初期設定の準備が必要です。

1.3.1.XDoclet の設定

XDoclet のインストールおよび設定方法について記述します。

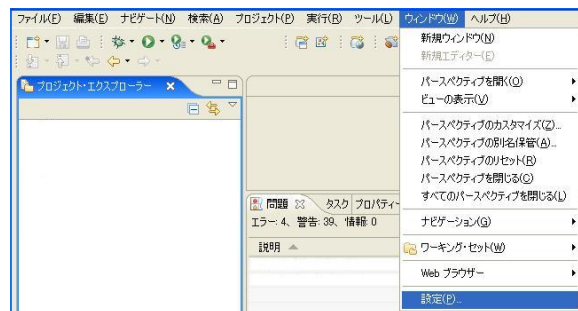
XDoclet のインストール

以下の場所にある zip ファイルを解凍します。

[WebOTX インストールディレクトリ]¥Studio¥xdoclet-bin-1.2.3.zip

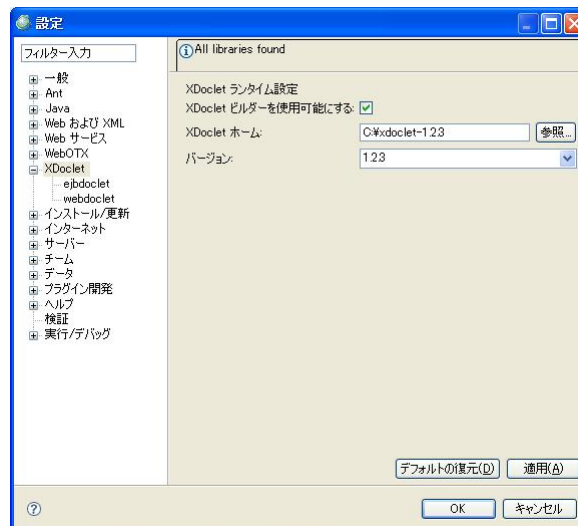
解凍先は、C:¥xdoclet-1.2.3 とします。

Developer's Studio を起動し、メニュー
の **ウィンドウ | 設定** を選択します。

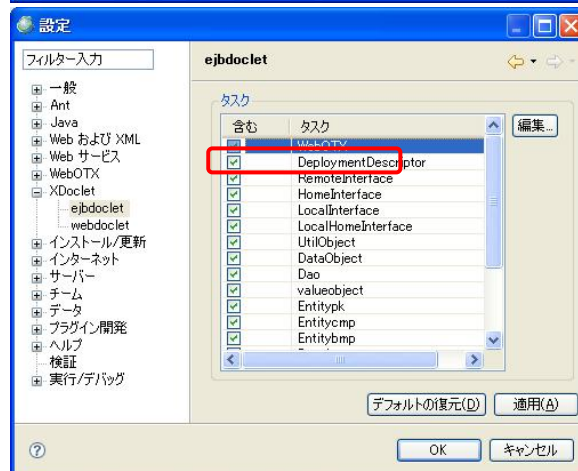


左のツリーから「XDoclet」を選択します。XDoclet ホーム、バージョンを設定します。

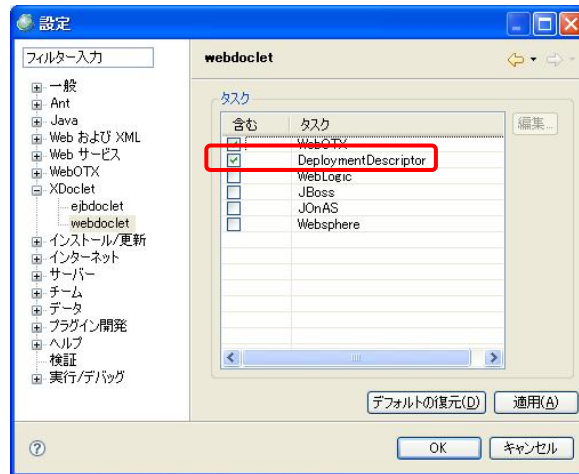
XDoclet ホームは、解凍先である
C:¥xdoclet-1.2.3 を指定します。バージョンは、1.2.3 を選択します。「適用」ボタンを押します。



XDoclet 階層下の ejbdoclet を選択し、
WebOTX のチェックボックスをオンにします。



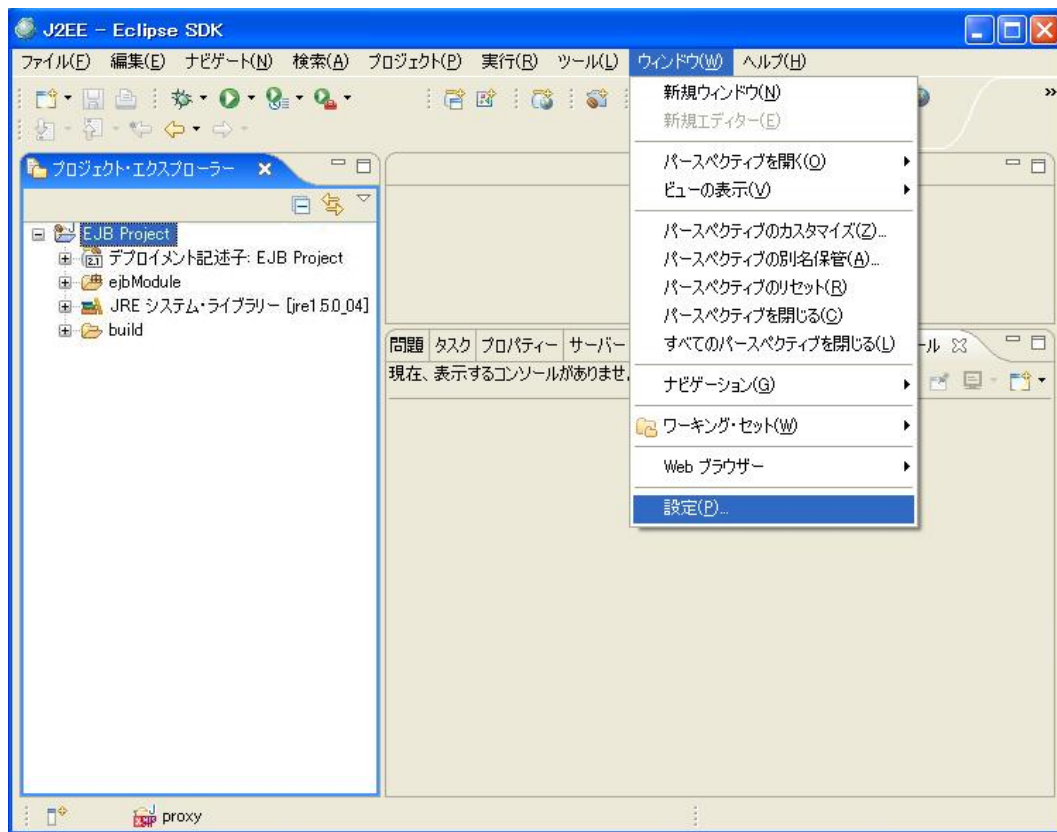
同様に webdoclet を選択し、WebOTX のチェックボックスをオンにします。最後に OK ボタンを押します。



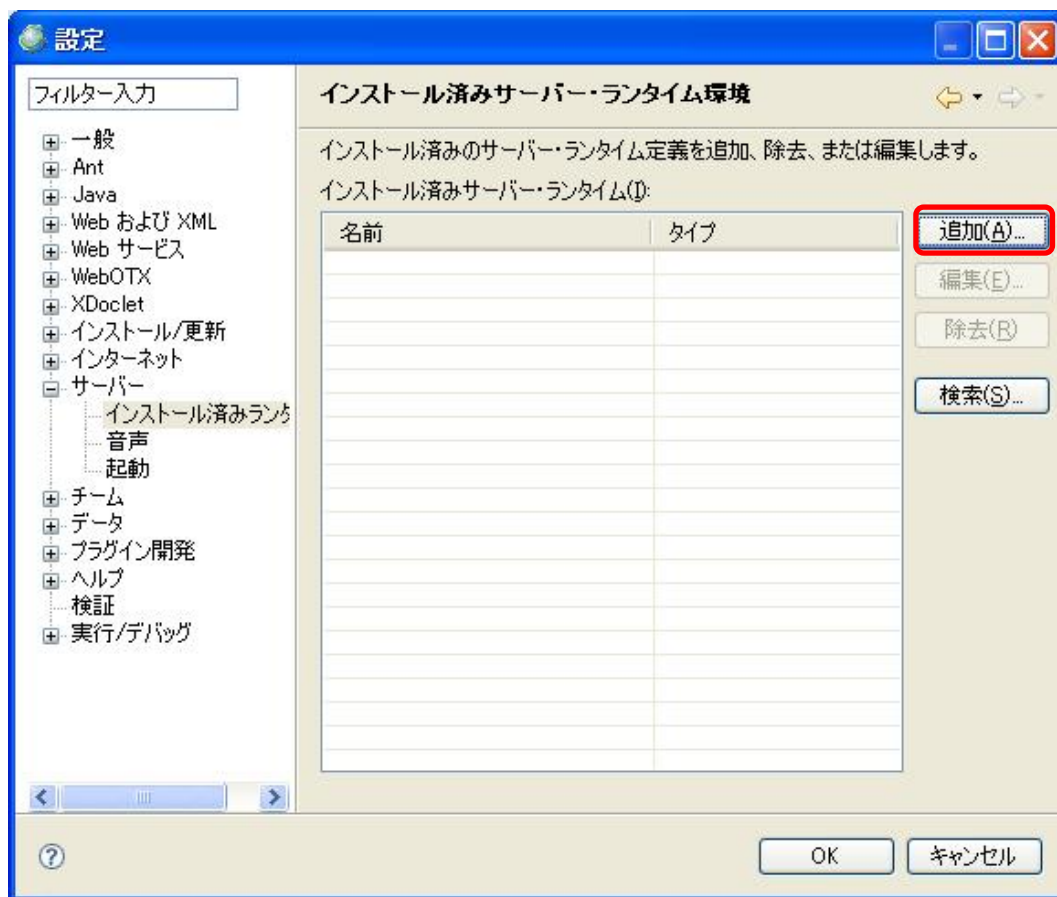
1.3.2.WebOTX ランタイムの設定

WebOTX ランタイムの設定を行います。

ウィンドウ | 設定 を選択します。



サーバ | インストール済みランタイムを選択し、追加ボタンを押します。



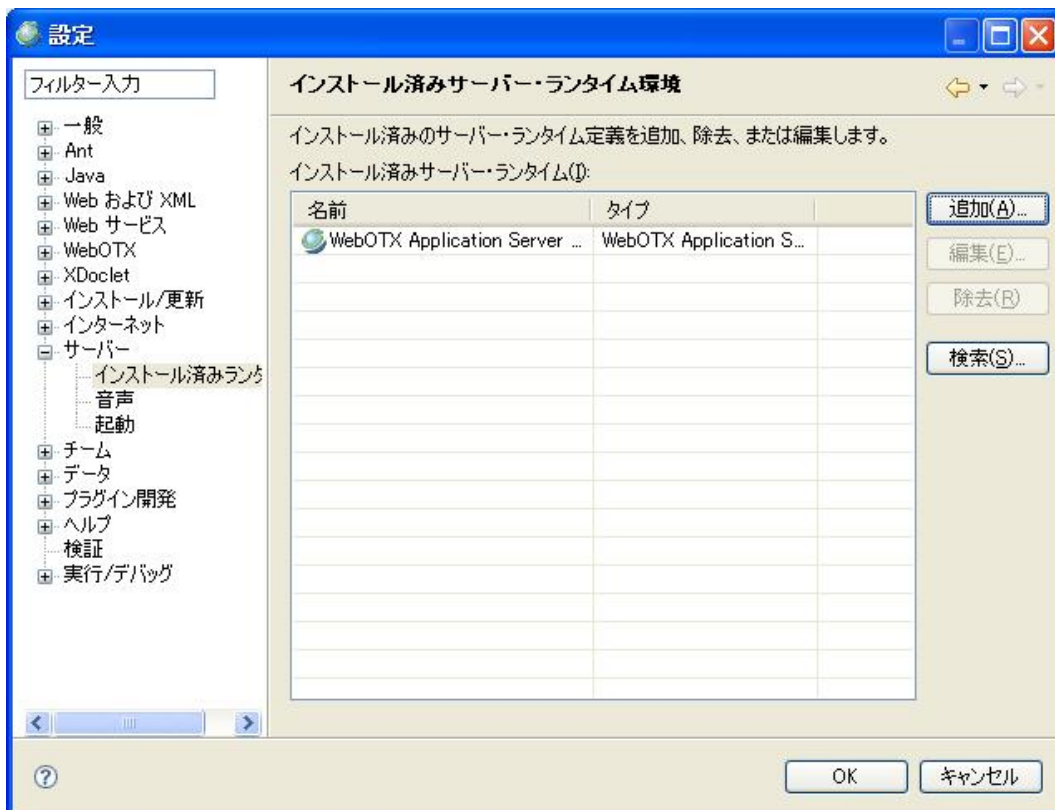
「WebOTX Local Server v7」を選択します。



WebOTX サーバのインストールパスで、WebOTX インストールパスを指定します。



一覧に、WebOTX Local Server v7 が追加されます。OK ボタンを押します。



1.4.TPTP

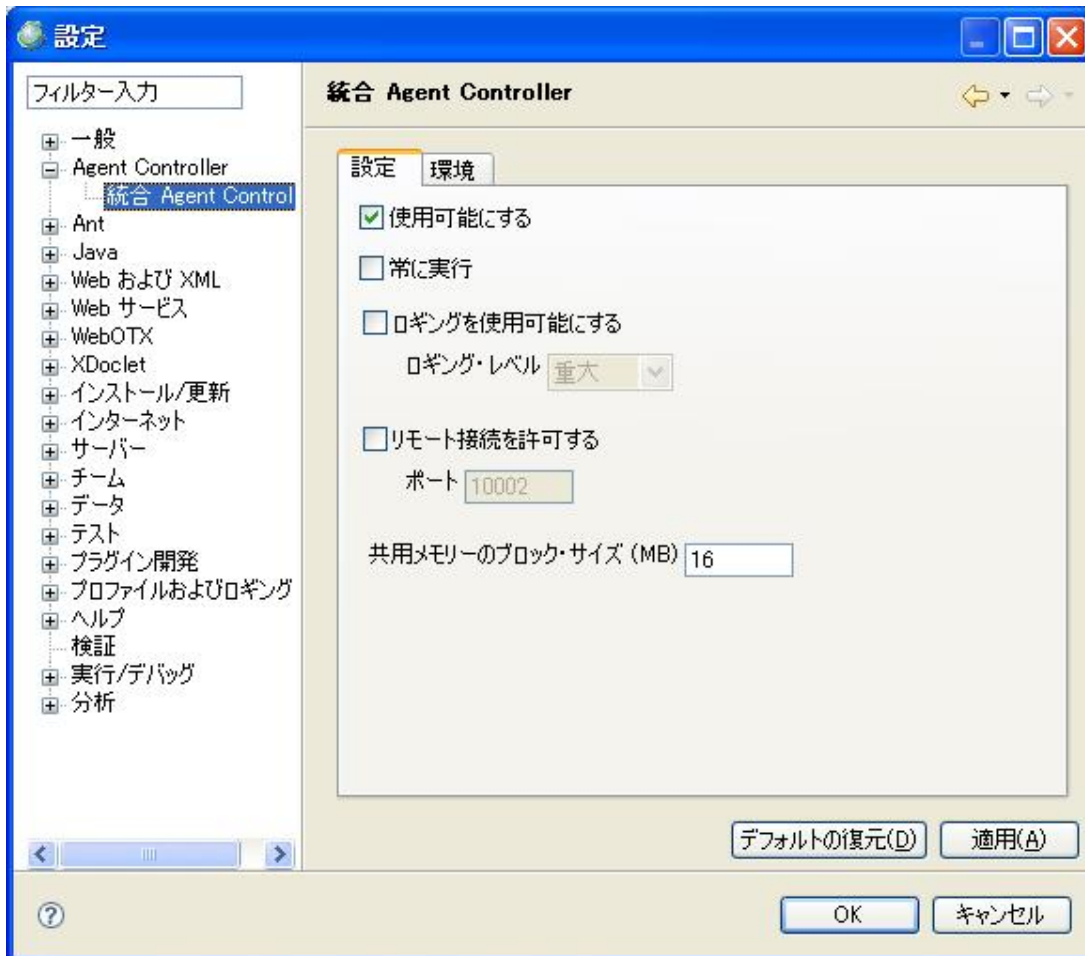
Test and Performance Tools Platform (TPTP と呼びます)を利用する場合は、次の初期設定の準備が必要です。

1.4.1.Agent Controller の設定

TPTP 付属である Agent Controller のインストールおよび設定方法について記述します。Agent Controller をリモートマシンから使う方法と、ローカルマシンから使う方法があります。

ローカルにある Agent Controller の設定

ローカルで使用する場合、Developer's Studio に内蔵されている統合 Agent Controller を利用します。以下に示す Eclipse の設定画面で統合 Agent Controller を設定します。



注意: TPTP が既にインストールされている場合は、Agent Controller サービスを停止してください。

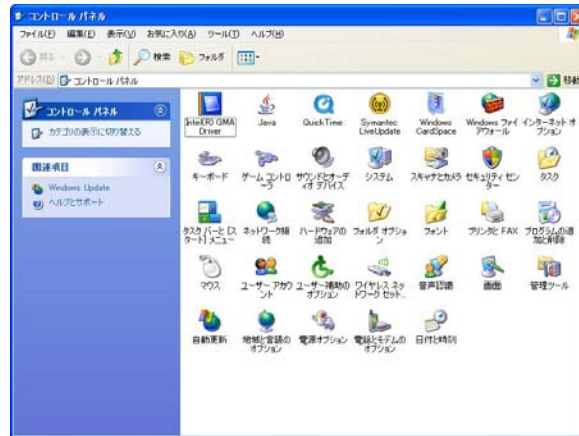
リモートにある Agent Controller の設定

以下の場所にある zip ファイルを解凍します。

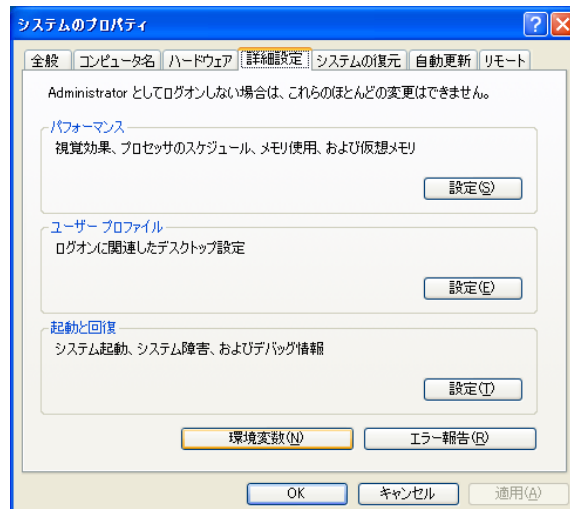
[WebOTX インストールディレクトリ]*Studio*agntctrl.win_ia32-TPTP-4.2.1.1.zip

解凍先は、C:\AgentController\tptdc\win_ia32 とします。

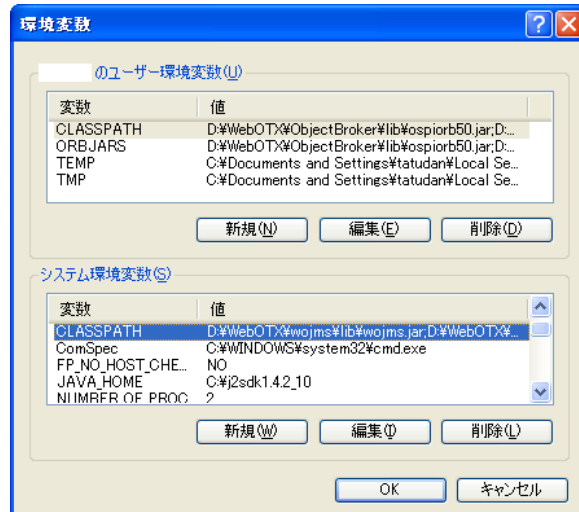
環境変数を設定します。コントロールパネルのシステムを選択します。



環境変数ボタンを押します。



システム環境変数の新規ボタンを押して設定します。



設定値は、以下のとおりです。

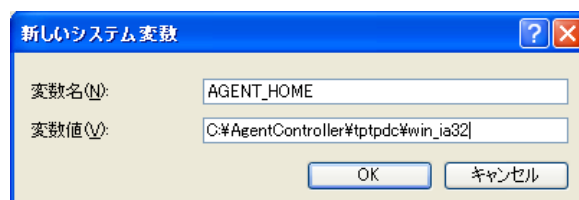
変数:

AGENT_HOME

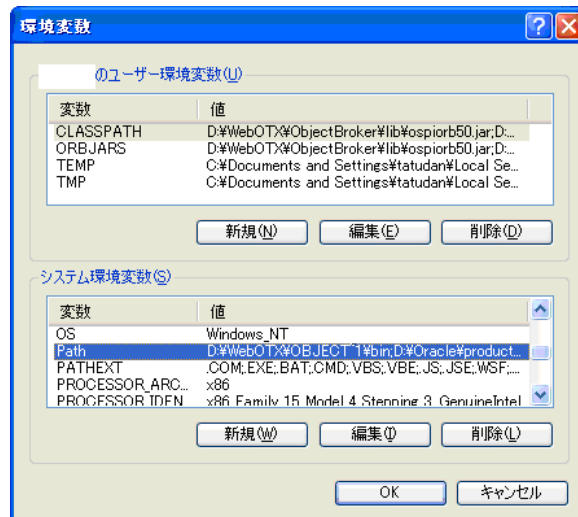
値:

C:\AgentController\tpdpdc\win_ja32

設定後、OK ボタンを押します。

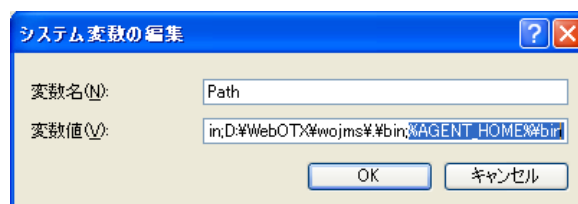


システム環境変数の PATH を設定します。Path にあわせて、「編集」ボタンを押します。

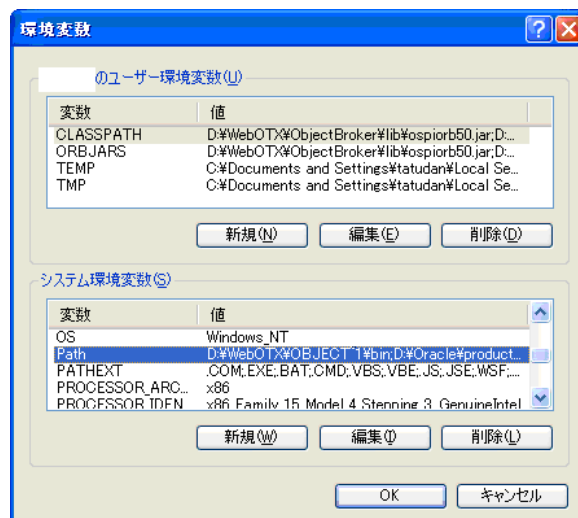


%AGENT_HOME%\%bin を変数値に追加します。

設定後、OK ボタンを押します。

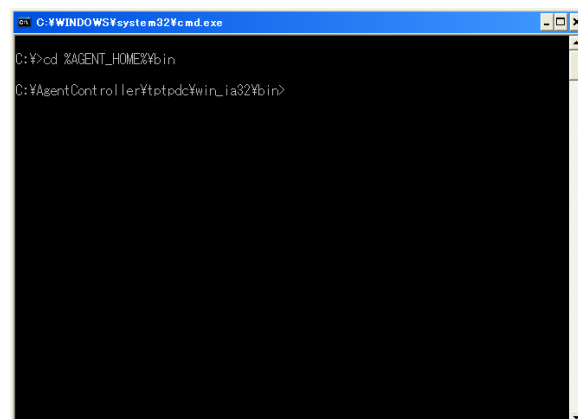


環境変数画面で、OK ボタンを押します。

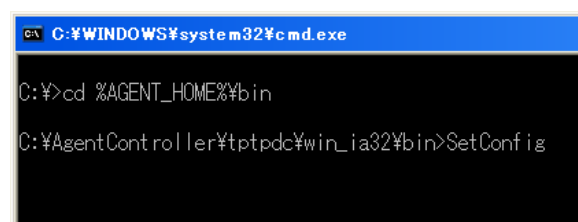


コマンドプロンプトを起動

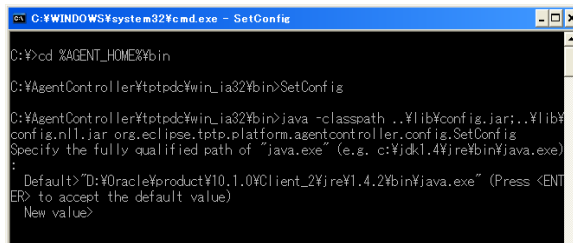
し、%AGENT_HOME%\%bin に移動します。



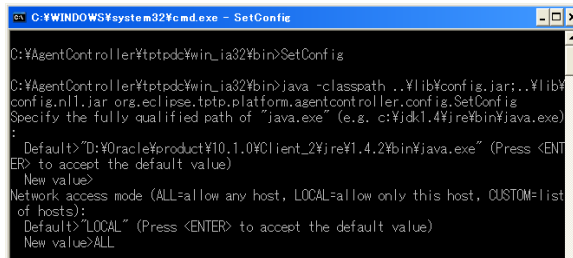
SetConfig と入力して実行します。



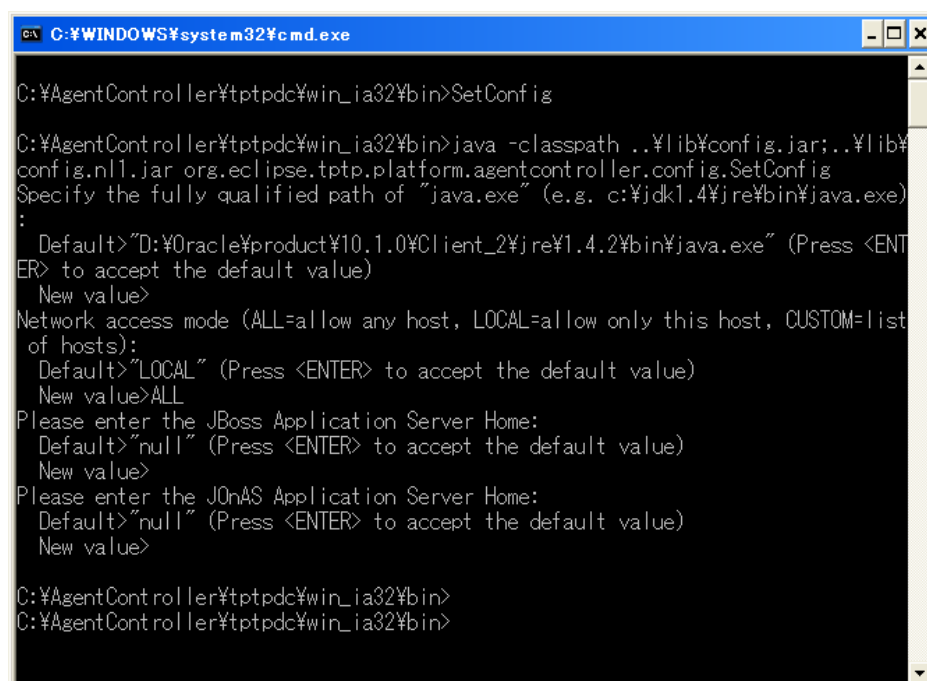
Java.exe の指定要求がありますが、そのまま ENTER キーを押します。



ネットワークアクセスの指定要求があります。ローカルマシンでプロファイリングするなら、**LOCAL** と記述して、ENTER キーを押します。リモートも含む全てのマシンに対してプロファイリングするときには、**ALL** と記述して ENTER キーを押してください。



以降、指定要求がありますが、そのまま ENTER キーを押してください。




Windows に Agent Controller サービスを登録します。%AGENT_HOME%\bin の manageservice.exe を実行することで Agent Controller を Windows のサービスに登録することができます。実行コマンドラインは以下のとおりです。

Manageservice add [Windows サービスに登録する名前] [AGENT_HOME]

ここでは、以下のように実行します。

Manageservice add "TPTP Agent Controller" "C:\AgentController\tptdc\win_ia32"



サービスを解除するときは、以下のように実行してください。
Manageservice remove [登録したサービス名]

Windows のサービスを起動して、登録していることを確認します。



「TFTP Agent Controller」サービスを起動して、状態が開始になったことを確認します。



これにより TFTP の初期設定は、完了です。